

## 序文

漢字は、世界の文字の中でも一、二を争うほど、込み入った点画をもっています。

例えば学校で習う「常用漢字」であつても、「鬱」は二十九画に達します。「鬱」は、書けなくても読めれば良い、電子機器で打てれば良い字とされていますが、日本人の漢字の知識や運用能力のバロメーターのように意識され、この字が書けるようになりたいと言う人が多く、さまざまな覚え方が発案されているくらいです。書きやすい略字「鬱」も作られ、JIS漢字（電子機器で日本語を処理するため日本産業規格（JIS）で定めた漢字の通称）の第1水準に採用されましたが、バランスの良さが好まれたのか「鬱」のほうが各方面で多用され、ネット上でもたくさん打たれ続けて、JIS漢字では第2水準だったのに、この字体で常用漢字表に追加されました。これだけでインパクトがある「鬱」ですが、さらにその右に「ㇿ」や「黒」などを加えた字まであるのです（その正体は本文で詳しく解説します）。

実は漢字には、後で紹介するように六十画を超える字まであります。こうした画数の多い漢字については、知的好奇心から知りたくなる人が非常に多く、中国や日本など各国の方々が書籍やインターネットで言及して、その注目度の高いことを教えてくれます。ただ、それらの発言は概してある部分に限定した散発的なもので、優れた記述も見受けられる一方、中には学問的な知見を欠くことによる誤解や謬説（びやうせつ）も見受けられました。せつかく興味深い事実を知りたいということでしたら、本書を通して正確な字

体とその背景に広がる漢字文化まで味得していただければと思います。

漢字の筆画を数えることは、隷書（れいしょ）から楷書（かいしょ）が成立した六朝時代（りくちゆう）「三〇一五九」には始まつていて、女真族（じゆんしゆ）が支配する金の地では、画数順に漢字を並べる道教色の濃い辞書が編纂（へんさん）され始めます。それが明代（みんだい）「三六一六四」に『海篇（かいへん）』類に受け継がれ、質量ともに洗練（せんれん）されて『字彙（じゑい）』に結実し、清朝（しんちゆう）「三六一五三」の『康熙字典（きんぎゆう）』に到達します。諸橋轍次博士（もろはしじゆじ）著『大漢和辞典』（大修館書店）は、『康熙字典』を含めた清朝考証学の最終地点、辞書の集大成とも評されています。『大漢和辞典』には、五万字以上の漢字が収録されています。常用漢字が二一三六字ですから、いかにたくさんなのかうかがえます。この辞典に収められたことを根拠にして、JIS漢字やユニコードに採用された字も少なくありませんでした。そしてそこには、六十四画に達する漢字まで収められているのです。

その一つである「龍四つ」の漢字が載った辞典がほしかった私は、中学生になつてついに『大漢和辞典』を手に入れました（笹原宏之『漢字ハカセ、研究者になる』岩波ジュニア新書、三〇三）。「𪛗」（126ㇿ）は漢字研究の扉を開けてくれた、目映（まぶら）いばかりの字でした。

この本は、その日本で最大の漢和辞典に収められた三十二画以上の漢字をすべて集めたものです。「𪛗」（58ㇿ）という字をどこかで見かけたことはありませんか？ この本にはそれに「𪛗」（くさかんむり）を被せた字や、「土」を下に加えた字、さらにその「鹿」の形が違う古めの字まで載せています。ほかにも日本で奈良時代から使われた字まで載っています。「𪛗」（60ㇿ）は『日本

書紀』や『風土記』から「おかみ」、つまり水の神の名前に当てられ、今でも神社の名などで使われ続けています。

こうした漢字は眺めているだけで楽しいものでしょう。もちろん見た目に凄い字が並んだ面白い本と感じてもらってもよいのですが、それだけではもったいないので、頭脳に刺激を与えるために、手で書き写すという趣向を設けています。

辞典によつて揺れを持つ部首、画数は『大漢和辞典』の情報に拠りました。字体、字形は明朝体で示していますが、付録で例示してあるように（後見返し）、楷書体で自然な筆法や自由な筆勢で大まかになぞつてみても問題ありません。自然に筆が運べて字形が整いやすいという筆順もあるものですが、古来、それが定まらない字もたくさんありましたから、本書ではとくに模範となる筆順を示していません。

複雑すぎる形を持つ漢字が過去のどの時点で、どういう意図で作られたのかという字源や文化的、社会的な背景、そして実際に使われた典拠や用例についても、漢字研究の専門家の立場から、最新の調査をもとにした研究成果を盛り込んだコラム「ささひろ・ポイント」として収録しましたので、併せてお楽しみ下さい。

本書をマスターしたら、画数の多い漢字の世界を正確に理解できようになるでしょう。そうしたら、その眼力を持つ人には違つて見えてくる次の世界も待っています。

「籟」（14画）は、今でも香港や台湾の道路などで見かけます。この本で馴染んでおけば、つぶれかけてはつきり読めなくとも現地で慌てることもなくなるでしょう。

広西や雲南地方に暮らす少数民族には、漢字の影響が見られるチワン文字やトンパ文字があり、後者には百足むかのように筆画が多

い字も見られます。ネット上でも見られるのでどんな文字かぜひ確認してみてください。ベトナムの字喃チュノムにも「籟」（ズア かめ）のような字が見られます。

日本では、『新撰字鏡』『類聚名義抄』『字鏡』『字鏡集』などの字書に、日本独自の字まで収められているのですが、そうした中にも画数の多い字が見られます。室町時代になると、「𪛗 いわくら」「𪛘 はしだて（𪛘は影印の誤認による幽霊文字）」「𪛙 あまのはしだて、平和な江戸時代になると𪛚 あまのはしだて」（五十六画）「𪛛 おおいちぎ」などが当時の国語辞書や戯作げさくの類に載ります（笹原宏之「京都の「天橋立」を表す日本製漢字の展開と背景―「𪛗」「𪛘」を中心に」、『日本語文字論の挑戦 表記・文字・文献を考えるための17章』勉強出版、二〇三／『戸籍』二〇三〇）。

これらに加え、西安の名物料理の「𪛜 ビアンビアン麵」や宮沢賢治の詩にある「𪛝」（笹原宏之『日本の漢字』岩波新書、二〇六）、日本産の幽霊名字の「𪛞 たいと」を「おまけ漢字」として巻末（177頁）に載せました。「おまけ漢字」が『大漢和辞典』に収められていないのは、まだその字が流行っていないか知りたられていなかったり、生み出されたりしていなかった時代に編纂されたためです。大規模な辞典であっても、見つけた全てを掲載しようとするものはむしろ稀まれで、何か基準を設けて取捨選択をするものです。そうするためには、漢字に対する眼力、選択眼も求められますが、『大漢和辞典』は出典が確かかどうかという典拠主義をよく守っていたようです。

それでは、三十二画以上の堂々たる漢字の世界、眺めたり写したりしながらゆつくりとお楽しみ下さい。 笹原宏之